

会議名	第2回宇部市産業振興計画推進委員会
日時	令和6年10月22日（火曜日）14時～15時30分
場所	宇部市総合福祉会館4階大ホール
出席者 （敬称略）	委員12名（欠席6名） 事務局6名 （宇部市産業経済部2名、商工振興課4名）
会議資料	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第2回 宇部市産業振興計画推進委員会 次第 ・ 宇部市産業振興計画推進委員会委員名簿 ・ 令和6年度第2回宇部市産業振興計画推進委員会資料 ・ 座席表 ・ ご意見アンケート
会議内容	
1. 専門部会の検討状況について 2. 令和7年度人材確保支援施策（案）について	
主な議事内容	
議題（1）専門部会の検討状況について 「事務局より専門部会の検討状況について説明」 「委員補足」 <ul style="list-style-type: none"> ・ 人材確保について、魅力的に映る市内企業が少なく、企業の魅力の発信が不足している。魅力にも賃金、働きがいなどあり、企業はこうした情報を発信する必要がある。加えて、企業力をつけることが必要。 ・ 長期的に解決する必要がある。 （質疑・意見） <ul style="list-style-type: none"> ・ 人材確保について、企業が求人を出しているが応募がないのか、ある職種や業界で人材不足が起きているのか、離職が原因で人材不足なのかといった視点からの議論はあったか。（委員） ⇒全国データで事務職は求職者数のほうが多い、専門職は求人数のほうが多いといったようなデータを提示したものの、本市の傾向が分かるような議論はなかった。技術職の現場で働く人材が不足しているという意見もあった。（事務局） <ul style="list-style-type: none"> ・ 地元定着促進事業に取り組むには、まず、労働者ニーズ調査事業が重要。 ・ 中小企業が従業員の現状を把握するためにモラールサーベイという手法を使っているように、調査結果とリンクした施策の提案が必要。（委員） ・ 地元定着の対象は、大学生か高校生か。（委員） ⇒どちらも対象と考えている。（事務局） <ul style="list-style-type: none"> ・ 高校生は学校の先生から企業を紹介されることが多いと思うが、現状、市外の企業へ就職す 	

る数が多い。企業が求める人材を具体的に学校側へ発信することが必要。（委員）

- ・ 県立高校では県内就職を促進しているため、特定の地域に絞って進路指導することは難しいことに加えて、生徒1人あたりに対しての求人数は約20倍程度あり、なかなか市内就職に至らない。
- ・ 近年、進路選択の際、地元志向が強くなっており、この傾向はコロナ禍に顕著となった。
- ・ コロナ禍が落ち着いてきているためか、最近は県外へ出る人が増加している。
- ・ 県外の大学に進学すると地元へ帰ってくる可能性は低いですが、山口県は進学率を上げる動きがある。（委員）

議題（2）令和7年度人材確保支援施策（案）

≪事務局より令和7年度人材確保支援施策（案）について説明≫

- ・ 中学生、小学生の段階から企業を知る必要があるという意見が専門部会で出た。（委員）
- ・ 子ども向けの体験教室や、従業員の家族に向けたイベントを開き、保護者等を巻き込み、会社を知ってもらう取組をしている。しかし外部や学生に向けた発信は足りていないと感じており、それが人材確保においてミスマッチにつながる。特に土木や建築職など専門人材の確保が難しい。（委員）

（意見）

- ・ 今回の議題は、新卒者をターゲットにしているが、新卒者は期待どおりに採用できていない。
- ・ 転出した人をいかに宇部に戻すかも重要。転出先で得たスキルは、宇部市にとっても十分に活用できる。
- ・ 働く人のウェルビーイングを考慮して、UIターン就職の支援や子育て環境のよさをPRするなど、県外から宇部市に移住したくなる取組が必要。（委員）
- ・ 高校生のインターンシップは1人の生徒が3年間で1社しか行くことができないので、高校生向けのインターンシップを拡充してもあまり活用が見込まれない。
- ・ 就職フェアなど企業ブースを学生が訪問するタイプのイベントもあるが、学生と企業がマッチしていないと感じる。
- ・ 学生は多数の企業と面談して、その中から選ぶほうがよい。現在ある就職フェアのように生徒が出向くのではなく、他市のように学校行事のときに企業に来てもらい、会社の紹介をする方法が効果的だと思う。
- ・ 学生の中には、小中学生の職場見学がきっかけで就職を決めた人もいるので、職場見学は長期的に考えて効果的だと思う。（委員）
- ・ 就職フェアを開催しても人が集まらない現状がある。市内の各大学や高校で企業説明会を開催してはどうか。（委員）

・ 県外から転入してきた人への支援はあるが、県外から宇部市の大学に進学した学生が市内就職するときの支援がない。支援策の一つとして、空き家を活用して、家賃が安く住めるといったような住居に関する支援を検討してはどうか。そこに住みたいので宇部市に就職するという人がでてくるのではないか。また、空き家、空き施設等を提供する側の問い合わせ窓口があれば活用が進むと考える。（委員）

・ 市営住宅は活用できるのか。（委員）

⇒市営住宅は空いている状況だが、住居に対する要望水準も上がっているため、活用は難しい。

空き家活用については、空き家情報が市に届かないという課題がある。

また、空き家があっても所有者の事情で貸せないという現状もあるため活用は難しい。（事務局）

（インターンシップについて大学生・大学院生の現状）

- ・ 大学生・大学院生のインターンシップは、1～2週間にわたる長期のインターンシップが主流になっている。また、これまで会社がインターンシップで得た学生の情報を採用時に使用することは禁止されていたが、ルールが緩和され、学生も興味がある企業については、採用に結びつくインターンシップの参加に積極的になっている。
- ・ 大学ではインターンシップ協議会を通じたインターンシップを実施していることから、企業に対して同協議会へ登録するように依頼をしているところ。
- ・ 学生が早めに企業を知ってもらうために、開催時期を問わず、就職フェアを実施しており、1年次からも参加を促している。
- ・ 山口大学は県外からの進学者が3/4と多いので、学生生活の早い時期から、県内企業を知ってもらう必要がある。
- ・ 山口大学工学部では、6～7割の学生が大学院に進学する。
- ・ 大学院生は自分の研究分野を活かして働きたい希望をもっているため、インターンシップに参加しても、企業が用意するプログラムとミスマッチになるケースが多い。
- ・ また、インターンシップに参加する際は、企業に負担（インターンシップに参加する学生の傷害保険や安全の確保など）がかかり、学生が経験できることが限られる現状がある。

（意見）

- ・ 地元就職を促進するターゲットとしての学生を高校生か大学生か絞り込む必要がある。また市外から進学してきた人にとっては「地元就職」の「地元」とは宇部市以外のことを指す。対象とする学生等によって取組も変わると考える。（委員）
- ・ 宇部出身の人は、地元に残りたいという人が多いと感じる。子どものころから企業を知ってもらうことは重要。
- ・ 大企業に比べて、中小企業は知ってもらうことは難しい。一方で、宇部市に住みたという人のニーズと、企業が発信している情報をマッチングさせる必要がある。
- ・ インターンシップを受け入れる企業側については、学生側のニーズを把握する必要があるた

め、両者の仲介役が必要。（委員）

- ・学生の就職活動はマイナビが主流となっているので、企業側は、情報発信を上手くしないと採用につながらないのではないかと。
- ・情報系の職種は企業側のニーズが高い。採用する企業側としては、どのように成長できる職場なのかを発信するとともに、山口県が働きやすいという魅力発信と併せて実施する必要がある。
- ・インターンシップについては、企業側が柔軟に対応することで地元定着に繋がると考える。（委員）

- ・山口県トラック協会では、県内の工業高校へ毎年1校ずつ出前講座を行っている。
- ・高校卒業してすぐに大型トラック免許は取得できないので、出前講座はどちらかという将来への投資として実施。
- ・実際、物流業界では新卒採用を行い、育成ができる企業体力がある企業は一部の大企業に限られる。中小規模の企業は即戦力を必要としている。（委員）

- ・大学生の就職活動にはインターンシップが重要だが、市内企業でインターンシップに参加できるところが少ない。
- ・保護者や学校の勧める企業に就職してしまうと、入社後、本人の希望とギャップがあり、離職につながるなどのミスマッチが起こる。ミスマッチを起こさないために、中学生から企業を知ることが必要。（委員）

- ・現状、人材確保につなげるためには、賃上げが望ましい。
- ・大企業と比べると給与面で劣る市内中小企業にとっては、賃上げするためには市補助が必要。
- ・また大企業と比べると給与面で対抗できないとするならば、それ以外の魅力、福利厚生面の整備をすることも考えられる。そのために住居補助や手当の補助があると良い。
- ・市内企業も魅力を付けていくとともに、その企業の魅力を発信していく必要がある。（委員）

その他

意見なし。

アンケート意見

- ・高校生は、近年、地元就職の意識が非常に強いと認識している。工業・商業・高専と産業教育が進んでいる宇部市では、地元就職の需要・供給ともにあると思えるが、市外への流出というギャップはどこから生じているのか。工業高校、商業高校からも県内外への大学・短期大学への進学が増えているのか。
- ・山口県産業教育振興会において、県内高校の取組の発表がされている。技術コンクールに出

る、地元特産物を使った食品やメニューを作るなど、各校がアイデアを出してやっているがこのような取組に中小企業が協賛し、プレゼンスの向上や親しみの醸成などをしてはどうか。

- ・ワークライフバランスや柔軟な働き方が求められる中、例えば、賃金は据え置くが、労働時間を減らして週休3日にする(結果、時給はあがる)という打ち手は、若年層に響くのか。雇用確保、ホワイト職場、賃金アップを全て満足するのは企業としては簡単ではない。製造業における3交代オペレーターでの採用では、女性オペレーターの活用も含め、どのような業務形態が今の若手にマッチするのか思案している。(委員)

(意見)

- ・空いている市営住宅を低価格で新卒者(県外者優先)に貸し出す。
- ・求人サイトから会社紹介の動画を見られるようにする。2~3分で、会社の中の様子、仕事風景、商品も含む内容で、若手職員が紹介してはどうか。(委員)

(インターンシップについて)

- ・大学生と高校生では、就職活動の様子が大きく異なることを理解した。
- ・高校生は、学校行事として実施する全員参加のインターンシップは3年間で1回のみの場合もある。希望者は長期期間中に参加している。
- ・企業へ応募前の会社見学は就職試験直前に行われるが1社を見学する生徒が大多数。
- ・3年生は希望が絞られた状態になるため、興味関心という点では1, 2年生対象が効果的だと考える。(委員)